



## 魔界水滸伝 2

栗本 薫

角川書店 (新書)

(3/25刊・¥600)

物語は前作の続きを受けて、「古きものたち」の着々と進む侵略と、それを追うルボライター安西らの活躍を描く。魚を思わせるインスマウス人に、取って代わられた団地を、ようやく脱出した安西兄弟は、かつて激しく憧れた葛城妹子と再会する。

前回より詳しく、クトゥールの神々による進攻の意味などが、説明されている。雰囲気は、さらにヴァイオレンス寄りになっていて、独自の展開は強まっている。本場のクトゥール物は、一般に動きのない作品が多い。だから、誰かも言っていたけれど「単なる恐怖小説」に終る、失敗作も結構書かれている。何ととっても、クトゥール物の価値は、ラヴクラフトの創造した「神話」そのものにある。複雑で、しかも曖昧な神話の魅力が、全てとっていい。だが、ベースが曖昧であるが故に、ラヴクラフトが心に描いていた以上のイメージを、表出できた作品は、恐らく極めてまれだろう。実際「神話」から感じ取れるスケールを越えた、クトゥール「小説」は、筆者の読んだ範囲では少ない。このシリーズで、その辺りのスケールの広がりがどこまで保てるのか、期待して読みたい。

(俊)